

Title	中国語を母語とする日本語学習者の「同等」の相手に対するスピーチスタイルの選択
Author(s)	田, 鴻儒
Citation	大阪大学言語文化学. 2011, 20, p. 89-101
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/77796">https://hdl.handle.net/11094/77796</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 中国語を母語とする日本語学習者の「同等」の 相手に対するスピーチスタイルの選択\*

田 鴻儒\*\*

キーワード：スピーチスタイル、中国語を母語とする日本語学習者、対話者の年齢

用跟日语母语话者作比较的方法来分析日语学习者如何根据对方的年龄来选择 speech level 的研究很多。但是在对年龄及其人际关系的认识上，不同文化圈之间很有可能存在差异。因此，从对年龄的认识及 speech level 的选择这两个侧面来重新审视学习者和母语话者间的异同是非常有必要的。本论文以中国日语学习者对象，通过对学习者和母语话者初次见面时的会话资料及学习者在采访过程中叙述的日语接触情况・语言使用意识的分析来阐明学习者如何根据对方选择 speech level 及其选择标准。

分析结果表明，在对年龄的认识上学习者和母语话者之间存在差异。母语话者把和自己同一年级的人看作同等，把比自己低二三个年级的人看作后辈。而学习者却把双方都看作是同等。这个差异是由于中日间在对年龄的认识上有所不同。也就是说日本以几岁的年龄差来衡量彼此的上下关系，而中国却以更大的幅度，即是否同辈来判断。

接下来在 speech level 的选择标准上，母语话者是以优先亲疏关系或上下关系的某一项来做选择。而学习者之间的个人差异非常大。C1 注意到在大学学习的标准和在接触场面体验到的实际使用之间存在差异，她虽然感到踌躇，但重新构筑了新的选择标准。即细心观察对方，和对方选择同样的 speech level。而 C2 受母语的社会文化规则及社会语言规则的影响，再加上她个人构筑的待遇规范意识，她根据和对方之间的心理距离来选择 speech level。最后的 C3 受电视剧里非正式的说话方式的影响而习惯用普通体说话，再加上比起 speech level 等语言形式，她更把注意力集中在说话的内容上，所以她在会话时无意识地使用普通体基调。总结以上分析结果得知，学习者的 speech level 的选择标准受多种因素影响。这些因素包括在大学掌握的选择标准，在中国及来日本后所接触的语言使用环境，对语言形式的重视程度，还有母语的社会文化规则及社会语言规则等。关于受哪些因素的影响及这些因素互相之间如何影响这一问题，学习者之间存在差异。这些差异导致了在 speech level 的选择标准上学习者间出现不同特征。

### 1 はじめに

人々是对話者や会話目的など、状況に応じて言語形式を選択している。日本語は文末の丁寧体と普通体が文法的に組み込まれているため、話す際に選択せざるをえない。日本語

\* 中国日语学习者跟同龄人会话时如何选择 speech level 呢？(田 鴻儒 (TIAN Hongru))

\*\* 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

母語話者（以下、母語話者）は場面に応じて巧みに文末を操作している（三牧 2002、伊集院 2004）が、日本語学習者（以下、学習者）にとって文末の使い分けは最も習得の難しい項目の1つである（ネウストプニー 1982）。近年、学習者が対話者の年齢に応じていかに文末を使い分けるかを、母語話者と比較し分析する研究が多い（上仲 1997、田 2009 など）。しかし、そもそも年齢とそれに伴う人間関係に対する認知は文化によって異なる場合がある。そのため、年齢に対する認識および文末の選択という2側面から、学習者と母語話者の異同を捉え直す必要があると考える<sup>1</sup>。本研究は、中国語を母語とする学習者を対象とし、年齢に対する捉え方および会話に見られる文末の分布という2側面から、母語話者と比較しつつ、対話者の年齢に応じた学習者の文末の使い分けの様相およびその選択基準を明らかにする。

## 2 基本用語と先行研究

### 2.1 基本用語

「ことばの性差や階層差などの『社会方言』や各地で話される『地域方言』が話し手の属性と結びついたことばの多様性をいうのに対して、スタイルとは、同じ一人の話し手や書き手が、聞き手や読み手、場面、目的、メディアなどに応じて使い分けることばの多様性、レパートリーのことをいう」（渋谷 2008:18）。日本語においてスタイルとして機能する言語項目は人称詞、終助詞、丁寧語、あいづちなどが挙げられる（渋谷 2008）。そのうち、丁寧語に関しては、スピーチレベルという分野で盛んに研究され、多くの示唆が得られている。本研究も文末の丁寧語と普通体に注目するが、より大きい研究背景のなかで捉え、スタイル<sup>2</sup>とスピーチレベル両者の研究成果を応用するために、スピーチスタイルという用語を用いる。スピーチスタイルを丁寧体と普通体に2分類し、特定の話者の全発話のうち、頻度の高いほうのスピーチスタイルを基本的スピーチスタイルと呼ぶ。

### 2.2 先行研究

対話者の年齢とスピーチスタイルの選択との関係を調査した研究には、母語話者を対象とした宇佐美（1995）、三牧（2002）、および学習者を対象とした上仲（1997）、田（2009）などがある。ここでは、本研究の調査対象者と調査方法に一番近い三牧（2002）を紹介し、母語話者のスピーチスタイルの選択基準をまとめる。

三牧（2002）は大学生44名を会話参加者として、同性2名をペアにし、参加者が同学

<sup>1</sup> 語用論の理論的枠組みを援用すると、人間関係の認知は社会語用論的側面であるのに対し、文末などの言語形式の選択は語用言語学的側面である。語用言語学は、語用論の中で言語学に近い部分である。一方、社会語用論は、伝達行為の解釈や遂行の根底にある、話し手と聞き手の相対的な力関係（上下関係）や社会的な距離（親疎関係）などの社会的認識を対象としている（清水 2009）。

<sup>2</sup> スタイルに関しては、1970年代以降、社会言語学的、心理言語学的アプローチから多くの研究がなされ、注意度やアコモデーションなど影響力の大きい理論が提示されている。詳しくはロッド（1996）の第4章を参照されたい。

年ペアと異学年ペア<sup>3</sup>の双方に参加するように組み合わせた。調査の結果、大学生が同学年の相手と会話する際にも、下学年の相手と会話する際にも、丁寧体基調と普通体基調の両方が現れた。この結果に関して、対同学年において、普通体基調の話者は基本的スピーチスタイルの設定に「上下関係」を優先し、同学年の同等意識・仲間意識を表示するのに対し、丁寧体基調の話者は「親疎関係」を優先し、初対面の疎の人間関係表示を重視すると指摘している。一方、対下学年において、普通体基調の話者は基本的スピーチスタイルの設定に「上下関係」を優先し、上位者意識表示を重視するのに対し、丁寧体基調の話者は「親疎関係」を優先し、初対面の疎の人間関係表示を重視するという。大学生の対同学年と対下学年における基本的スピーチスタイルおよび各スピーチスタイルの選択を表 1 にまとめる。このように、大学生同士の初対面会話において、母語話者は親疎関係と上下関係のどちらかを優先させ、スピーチスタイルを選択している。

表 1 大学生の対同学年と対下学年におけるスピーチスタイルの選択

場面	基本的スピーチスタイルの選択			各スピーチスタイルの比率
	基本的スピーチスタイル	選択基準	人数(割合)	
対同学年	普通体	「上下関係」を優先し、同等意識・仲間意識表示を重視	79%	・普通体が 90%以上 ・丁寧体は会話の冒頭の時間帯のみ ・比率を相手と類似させる
	丁寧体	「親疎関係」を優先し、初対面の疎の人間関係表示を重視	21%	・2~3 割の普通体を交える ・比率を相手と類似させる
対下学年	普通体	「上下関係」を優先し、上位者意識表示を重視	67%	・普通体が 8 割、丁寧体が 2 割
	丁寧体	「親疎関係」を優先し、初対面の疎の人間関係表示を重視	33%	・2~3 割の普通体を交える ・同じ丁寧体基調の相手より普通体を 1 割程度多めに選択し、上下関係を表示

(三牧 2002:71 の表を筆者が一部編集)

### 3 研究方法

#### 3.1 調査対象者およびデータ収集方法

中国の大学で日本語を専門として 3 年間勉強した後、来日したばかりの学習者 3 名 (21~22 歳) をインフォーマントとした<sup>4</sup>。全員が女性で、日本語能力試験 1 級を取得し、会話能力テスト OPI<sup>5</sup>の結果は中級の中~上級の下であった。学習者が対話者の年齢に応じていかにスピーチスタイルを使い分けるかを調査するために、それぞれ学習者と同等 (同学年、以下《対同》)、学習者より年下 (2 学年下、以下《対下》) と、年齢差の異なる母語話者 2 名ずつと 15 分間の 2 者間初対面会話に参加してもらった。年齢や出身を含め対話者に関する情報は事前に一切与えず、話題は全く自由にした。会話はすべて録音録画した。

<sup>3</sup> 異学年ペアの学年差は 2 年または 3 年である。

<sup>4</sup> 学習者は 2008 年 9 月に来日し、調査は 10~11 月に行なった。

インフォーマントを少数に絞り、学習者のスピーチスタイルの選択基準とその要因に関して、会話データや日本語接触状況、言語使用意識などから包括的、かつ質的に詳細に検討することを優先した。

<sup>5</sup> OPI とは、oral proficiency interview の頭文字であり、全米外国語教育協会が開発した外国語の口頭運用能力を測定するためのインタビューテストのことである。

会話終了直後に、会話に関する感想や意識などのインタビューを実施した。また、会話収録前後に、来日前と来日後の日本語接触状況や言語使用意識を把握するためのインタビューも行った。表2にインフォーマントおよび会話の組み合わせをまとめた（JS1とJS3は別人である）。

表2 インフォーマントおよび会話組み合わせの情報

	学習者との関係	学年	年齢	出身地	日本語能力試験	会話能力テストOPT	来日
C1	—	3	21	中国遼寧省	1級	中級の上	2008.9
JS1	同	3	21	宮崎県	—	—	—
JY1	下	1	18	大阪府	—	—	—
C2	—	3	21	中国遼寧省	1級	中級の中	2008.9
JS2	同	3	21	山口県	—	—	—
JY2	下	1	19	奈良県	—	—	—
C3	—	3	22	中国遼寧省	1級	上級の下	2008.9
JS3	同	3	21	宮崎県	—	—	—
JY3	下	1	19	鳥取県	—	—	—

### 3.2 分析方法

上記の方法で収集した6ペアの初対面会話データを全て文字化した。文末に注目し、丁寧体の文には（+）、普通体の文には（0）をつけた。これを基に、Excelで分析資料の会話データベースを作成した。なお、中途終了型発話とあいづち、「そう」系表現<sup>6</sup>は別の視点から分析する必要があると判断し、本稿では分析に含めないことにした。インタビューデータは必要な部分を文字化し、分析資料に加えた。

## 4 対話者の年齢に対する学習者の捉え方

2.2でまとめた通り、大学生同士の初対面会話において、母語話者は2、3年の学年差による上下関係を意識しスピーチスタイルを選択している。一方、学習者は対話者の学年、年齢をいかに捉えているのだろうか。インタビューで語った学習者の意識を基に分析する。

C3は《対同》の対話者を、「新しく知り合ったクラスメートみたい」、《対下》の対話者を、「私より3つ年下で大学1回生。同じくらいの年なので同世代の人と感じた」と捉えている。C1は《対同》《対下》の対話者をいずれも「年齢が同じくらい」、「同世代の人」と認識している。C2は《対同》の対話者が「同級生、同世代の人」、《対下》の対話者が「私より3つ年下だったっけ。彼女が気にしているかどうか分からないけど、私は自分が年上とは思わない」と語った。さらに、C2は年齢にまつわる対人関係について、「下は17、18歳まで、上は36、37歳までを同世代とみなす。つまり、私の妹のような年、高1、高2は年下だし、親のような40歳以上の方は違う世代になる」と語った。

<sup>6</sup> 学習者は待遇意識と関係なく、「そうですね」など丁寧体の「そう」系あいづちと返答詞を頻繁に使い、基本的スピーチスタイルまでも変えることがある（田 2009）。

以上より、学習者は学年と年齢の差を気に留めず、いずれの対話者も「同世代」、「同等」と捉えていることがわかった。C2 の語りからもわかるように、学習者は 3 名とも大きな尺度、つまり世代で相手との人間関係を認知しているのである。橋本・三井 (2005) は、中国人の待遇行動において、ものさしの 1 つとして世代という上下意識が大きく関わっていると報告している。つまり、年齢による相対的上下関係の認識において、日本では数歳の差でも気にするのに対し、中国ではより幅広く世代差で捉えるという相違がある。このような異なる感覚と評価は社会的認識 (Kasper & Rose 2001) であり、言語的側面というよりも社会的側面である。

母語話者と違い、《対同》《対下》をともに「同等」と認識している学習者は初対面会話においてどのような基準を持ってスピーチスタイルを選択するのだろうか。次節では、スピーチスタイルの分布と言語使用意識を分析し、学習者のスピーチスタイルの選択基準を考察する。

## 5 学習者のスピーチスタイルの選択

スピーチスタイルを選択する際の基準について分析した結果、各学習者が異なる基準を持っていることがわかった。以下では、順に 3 名の学習者のスピーチスタイルの分布を示し、選択基準を考察する。

### 5.1 C1 のスピーチスタイルの選択

#### 5.1.1 C1 のスピーチスタイルの分布

C1 のスピーチスタイルの分布を対話者のものとともに図 1 に示す。図 1 から C1 のスピーチスタイルの分布の特徴を次の 2 点にまとめた。(1) いずれの会話も対話者と同じ基本的スピーチスタイルを示している。(2) 《対同》において、対話者 JS1 の普通体の比率が 93% に達しているのに対し、C1 は 69% にとどまっている。表 1 にまとめた通り、母語話者の場合、普通体基調を設定する《対同》のペアは両者とも 90% 以上の普通体を選択し、対称的パターンを示している。母語話者と比較すると、学習者の普通体の使用率が目立って低いことがわかる。

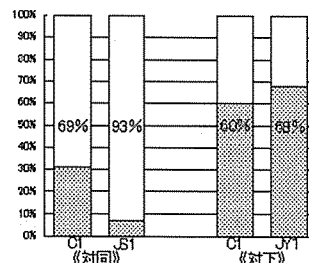


図 1 C1 と対話者のスピーチスタイルの分布  
□：普通体 □：丁寧体  
(%は基本的スピーチスタイルの比率を表す)

#### 5.1.2 C1 のスピーチスタイルの選択基準

続いて、言語操作意識と会話の分析を通して、C1 のスピーチスタイルの選択基準を探ってみたい。

## (1) 対話者と同じスピーチスタイルを選択する

C1 は初対面会話におけるスピーチスタイルの選択について次のように語った。「初対面の人に対して丁寧体と普通体のどちらを使うべきかよく分からない」。その理由に関しては、「中国の大学の授業で、初対面など親しくない人と話す時は丁寧体を使うべきだと習った。しかし、日本に来て同じクラスの日本人と初めて会った時、丁寧体を使ったら、『丁寧体はすごくフォーマルだから使わなくていい』<sup>7</sup>と言われた。それからクラスメートには普通体で話している」と説明した。会話収録時にどのように話したかを質問したところ、《対同》では「最初2人も丁寧体を使ったけど、話しているうちに相手が自然に普通体に変ったので、私もだんだん普通体に変った」と述べ、《対下》では「最初どちらを使うべきか考えた。彼女が丁寧体を使ったので、私もずっと丁寧体を使っていた」と語った。インタビューから、C1 は対話者を観察し、相手と同じスピーチスタイルを選択する意識がうかがえる。この言語操作意識を、上記基本的スピーチスタイルを対話者と揃えて設定した分析結果(図1)と照らし合わせて考えると、C1 のスピーチスタイルの選択基準およびその要因は、中国の大学で習ったスピーチスタイルの使用規範と来日後の接触場面で経験した実際の使用状況との間に不一致が生じたため、C1 が戸惑いを感じながら、「自身のスピーチスタイルを相手に合わせる」ように能動的に新たな規範を再構築したといえる。

## (2) 対話者に遅れて丁寧体から普通体にシフトする

C1 は相手と同じように話そうと意識しているにも関わらず、なぜ《対同》において普通体の比率が相手より24%も少なかったのだろうか。以下では、会話に見られる母語話者と学習者のスピーチスタイルの変化を比較分析し、その原因を探る。会話におけるスピーチスタイルの変化を観察するため、普通体の割合が15分間の会話の中で変化していく様相を図2にグラフ化した。図2では、母語話者のJS1が最初から普通体基調を示し、その後時間の経過とともに普通体が徐々に増加し、第3段階以降普通体の使用率は100%に達している。一方、学習者は最初は普通体基調を示しているが、第2段階で丁寧体基調に逆戻りし、第3段階から再び普通体基調を示した。その後普通体の比率が増加し、最後の段階で100%の使用率を示している。

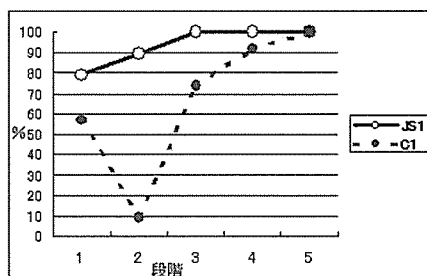


図2 《対同》におけるC1とJS1の普通体の割合の変化  
(横軸が時間(単位は段階、1段階=3分)、縦軸が普通体の比率を表す)

<sup>7</sup> 社会人を調査した宇佐美(1995)は、初対面会話において丁寧体を基本的スピーチスタイルに設定することは日本社会の習慣であると指摘している。一方、大学生を調査した三牧(2002)、伊集院(2004)では、初対面の早い段階で普通体を選択する大学生が多く見られる。これは日本の若者のポジティブ・ボライトネス志向の表れである(伊集院2004)。

母語話者と学習者を比較すると、JS1 は早い段階から普通体基調を確立し、その後も一貫して普通体基調を保持している一方、学習者は普通体基調が安定して現れるまで時間がかかっていることがわかる。

結論を導く前に、なぜ学習者が《対同》の第1段階において第2段階より普通体をより多く選択しているか、その要因を分析する。第1段階の普通体の内訳をみると、12発話中、名詞文の回答が4つ、名詞文の質問と名詞文の復唱がそれぞれ2つ、意味交渉における確認が2つであった。これらの普通体は初対面会話の初期段階において、学習者が個人情報提示したり、個人情報に対する自発的説明や意味交渉を行ったりする際に無意識的に普通体になりやすいものである(田 2010)。つまり、第1段階の普通体基調は学習者が意図的に選択したものではない。

以上から、学習者が普通体基調に切り換えたのは第3段階であるといえよう。では、なぜC1は母語話者に遅れて普通体基調に切り換えたのだろうか。言語使用意識と会話データを基にその要因を分析する。C1は「始めは『です・ます』体を使っていたが、話すうちにだんだん普通体が変わった」と、自らのスピーチスタイルの変化の全体的な傾向は把握している。しかし、母語話者が早い段階で普通体に切り換えたにも関わらず、C1は「だんだん」と普通体にシフトしたと認識しており、シフトのタイミングとプロセスを明確に把握していない様子がうかがえる。以下、会話データを用いてこの分析の妥当性を示す。

次頁の会話例1は、名前と所属の紹介が終わった直後に交わされた会話の冒頭部分である。スピーチスタイルの変化を観察すると、最初はC1もJS1も丁寧体を選択している(1~13)<sup>8</sup>。しかしその後、JS1は共通の知り合いがいること(11、13)をきっかけに、急速に普通体にシフトし(9→15)、その後も普通体で話し続けている。その上、カジュアルな関西地方方言も使用している(25)。一方、C1はそのまま丁寧体を続けている。この非対称的選択は、C1が普通体基調にシフトする6分頃の時点まで続く。

母語場面を調査した三牧(2002)は、同学年の大学生同士は相手のスピーチスタイルに注意を払いながら相互に調整し合い、基本的スピーチスタイルを揃えるだけでなく、各スピーチスタイルの比率に至るまで非常に類似のパターンを示していると指摘している。また、普通体基調に設定した同学年ペアの普通体の比率は双方とも90%以上に達しており、わずかな丁寧体は基本的スピーチスタイルが普通体に確定するまでの会話の冒頭の時間帯(開始後20秒まで)に限られていたという。母語場面のダイナミックな相互調整に比べ、C1とJS1はスピーチスタイルに関する規範と操作知識を共有しておらず、巧みに相互交渉を行うことができないため、普通体基調を確立させる時期がずれて、結果的に普通体の比率がJS1とかけ離れていたと考えられる<sup>9</sup>。

<sup>8</sup> 分析方法で記した通り、本稿は「そう」系表現は分析項目に含めない。

<sup>9</sup> 場面(母語場面と接触場面)に応じた母語話者によるスピーチスタイルの使い分けの実態は伊集院(2004)に詳しい。



## 【会話例 1 : 《対同》、互いのキャンパスの紹介と C1 の来日経緯について】

C1: 学習者、JS1 : 同等の母語話者

	【C1】	【JS1】
1 C1 : A 大学の B キャン/パスですか?	(+)	
2 JS1 : /そうです。		
3 JS1 : B です。		(+)
4 C1 : あ、そうですか。		
5 JS1 : はい。		
6 C1 : 私、C のキャン/パスです。	(+)	
7 JS1 : /あ、そうなんや。		
8 C1 : ん。		
9 JS1 : 中国人の知り合いがいるけど、その子も C って言っていました。		(+)
10 C1 : あ、そうですか。		
11 C1 : 一緒ですよ。	(+)	
12 JS1 : はい。		
13 C1 : 一緒に日本に来て、/A に入って、 /専門も一緒です。	(+)	
14 JS1 : /あ、そうなんや。/あ、そうなんだ。		
15 JS1 : え、じゃ、みんな留学生グループみたいな感じで、仲いい?		(0)
16 C1 : そうですね。		
17 C1 : 中国の大学は A と契約していて毎年 15 人ぐらいここに来ます。	(+)	
18 JS1 : あー、そうなんだ。		
19 C1 : ん。		
20 JS1 : でも、15 人しか来れないのに、すごい。		(0)
21 C1 : やー。		
22 JS1 : すごい。		(0)
23 C1 : その時は、向こうで英語のテストと日本語能力試験一級に合格したら、ここにできます [留学できます]。	(+)	
24 JS1 : えー、すごい。		(0)
25 JS1 : えー、めっちゃ難しいやね。日本語一級って、		(0)
26 C1 : でも、専門、昔専門は日本語です。	(+)	
27 JS1 : あー、そうなんだ。		
28 JS1 : えっ、それでもすごい。		(0)



以上の結果をまとめると、同世代の相手と初対面会話をする際の C1 のスピーチスタイルの選択基準は、対話者のスピーチスタイルを観察し、相手と同じ選択をすることであるといえる。ただし、普通体基調の会話においては、母語話者は会話の早い段階から普通体へシフトしているのに対し、C1 は会話の途中から普通体へシフトしているため、普通体の比率が母語話者と比べかなり低い結果となっている。

## 5.2 C2 のスピーチスタイルの選択

## 5.2.1 C2 のスピーチスタイルの分布

C2 のスピーチスタイルの分布を対話者のものとともに図 3 に示す。図 3 から、C2 のス

スピーチスタイルの分布の特徴を次のようにまとめた。対話者はいずれも丁寧体基調を設定するのにに対し、C2 は《対同》で丁寧体基調を、《対下》で普通体基調を示している。なぜ C2 がこのような分布を示すのか、インタビューで得られた言語使用意識と実際の会話データを基に、スピーチスタイルの選択基準を分析する。

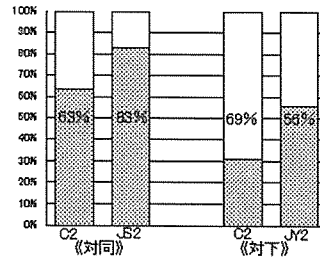


図3 C2と対話者のスピーチスタイルの分布  
□：普通体 ■：丁寧体  
(%は基本的スピーチスタイルの比率を表す)

### 5.2.2 C2のスピーチスタイルの選択基準

4節で述べた通り、C2は17、18歳から36、37歳の相手を同世代で同等だと捉えている。C2は、インタビューで初対面の「同等」の相手に対するスピーチスタイルの使用意識を次のように述べた。「年上の人に対しては尊敬の気持ちを表すために丁寧体を使う。普通の年齢、大学生とか、院生とかはもうそんなに尊敬する形を使わなくてもいい。全然意識していなかった」。すなわち、C2は年上（上世代）の相手に対しては丁寧体を使うべきだと強く意識しているが、同等や年下の相手に対してはスピーチスタイルに注意する必要がないと思っている。なぜC2はこのような意識を持っているのだろうか。C2はインタビューで、「『尊老愛幼』は中国の伝統的な思想美德。どの国の言葉で話しても年上の人には尊敬すべき。これは文化面のこと」と発言しており、中国の社会文化的知識と社会言語学的ルールの影響を大きく受け、丁寧体を年上の人に対する尊敬の気持ちを表すための言語的手段だと捉えていることがわかる。

「同等」の相手と会話する時にスピーチスタイルを気に留めないC2だが、2会話において基本的スピーチスタイルが異なっているのはなぜだろうか。C2が対話者の印象について、普通体基調を選択した《対下》の相手は、「中国語を習っているからか、留学生、特に中国人留学生のことをよく理解できる」と、好印象を持ち、心的距離を近く感じている。一方、丁寧体基調を示した《対同》の対話者に関しては、「あんまり明るくない。第一印象があんまりよくなかった。私が話さないと話してくれなくて疲れた。話しにくかった」と、印象があまりよくななく、心的距離が遠いと語った。このインタビュー結果とC2の基本的スピーチスタイルの選択を考え合わせると、C2は心的距離感に応じてスピーチスタイルを選択する傾向があると推測できる。

次に、C2が《対下》において丁寧体基調から普通体基調に切り換えるプロセスを分析することで、上記の推論の妥当性を確認する。C2は会話の冒頭から丁寧体を用いて相手に質問している。例えば、「A 大学ですか?」「何年生ですか?」「どうして中国語を選びましたか?」「出身地はどこですか?」などである。こうした個人情報交換期を経て、対話者JY2の専門が中国語であること、出身地の奈良が故郷と同じ古い町であることが判明した。その上、JY2が終始笑顔でフレンドリーな態度を見せているため、C2はJY2のこ

とを「明るい人。親しみやすい人」と感じた。C2 が感じた心的距離の近さが直ちにその直後の発話に表れる。「中国に行ったことはある?」「つもり [予定] はある?」「どこに行きたい?」など、C2 の質問が丁寧体から普通体が変わった。質問のスピーチスタイルの変化から分かるように、C2 は対話者に対する心的距離の短縮に応じてスピーチスタイルを丁寧体から普通体に移している。一方、心的距離が遠く感じた《対同》では、このようなシフトは観察されなかった。

以上をまとめると、C2 は同世代の相手と初対面会話をする際にスピーチスタイルの選択に注意する必要はないと表明しているが、相手に対する印象および会話に見られるスピーチスタイルの変化のプロセスを分析した上で改めて考察した結果、C2 は対話者に対する心的距離感でスピーチスタイルを選択していることが明らかになった。この結果は、学習者が心的距離の大小に応じてスピーチスタイルの選択を行なうという上仲 (2007) の報告と一致する。以上から、心的距離の遠近に応じてスピーチスタイルの選択を行うことは、一部の学習者に共通する待遇規範意識だと考えられる<sup>10</sup>。

### 5.3 C3 のスピーチスタイルの選択

#### 5.3.1 C3 のスピーチスタイルの分布

C3 のスピーチスタイルの分布を対話者のものと合わせて図 4 に示す。図 4 では、《対同》《対下》の対話者がそれぞれ普通体基調、丁寧体基調を設定しているのに対し、C3 はいずれも普通体基調を示している。つまり、C3 のスピーチスタイルの特徴は、対話者が同等か年下である場合、普通体基調を選択することである。5.3.2 では、インタビューで得られた言語接触状況と言語使用意識を基に C3 のスピーチスタイルの選択基準を考察する。

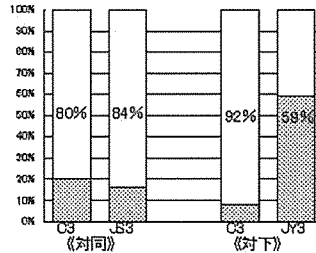


図 4 C3 と対話者のスピーチスタイルの分布  
□：普通体 ■：丁寧体  
(%は基本的スピーチスタイルの比率を表す)

#### 5.3.2 C3 のスピーチスタイルの選択基準

中国にいた時の日本語使用に関して、日本人と話す機会が非常に少なかったが、趣味でよく日本の青春ドラマを観ていたと C3 は振り返った。ドラマが日本語学習に与えた影響について、「ドラマのなかの日本人はみんな『る』体で会話しているから、『ます』体は変じゃないかなと思って、知らないうちにいまの話し方になっている」と C3 は述べ、ここから、

<sup>10</sup> C2 は同等と捉えている《対下》の会話において、対話者が丁寧体基調を示しているにもかかわらず、心的距離が近いだけで普通体基調を選択した。一方、母語話者の場合は、心的距離はスピーチスタイル選択の重要な選択基準ではあるが、《対同》の場合は、心的距離が近くても、相手と相互交渉を行い、同一の基本的スピーチスタイルに設定することが社会的規範として優先される (三牧 2002)。

ドラマのなかの言葉遣いに大きく影響を受け、普通体使用に慣れたことがうかがえる。

また、会話で気をつけたことについて、C3 は次のように語った。「会話の時、内容のほうを多く考えていた。彼女の話の内容に注意して聞き取ってそれに答え、また自分の話す内容を考えていた。文法と『ます』体・『る』体をあんまり気にしなかった」。つまり、C2 は「注意」(Labov 1966) の焦点を言語形式ではなく、情報内容に置いていた。実際の会話を観察しても、C3 は文法の正確な形態処理を気にせずに、一見流暢に会話している。自身が自覚している通り、C3 は会話をする際に、文法やスピーチスタイルなどの言語形式の正確さあるいは適切さよりも、コミュニケーションのスムーズな進行を優先しているといえる。

実際の会話においても、C3 は対話者のスピーチスタイルを観察せずに、会話冒頭から普通体を使っている。会話例 2 から C3 が常に普通体を使っている様子がうかがえる。

#### 【会話例 2: 《対同》、学年・大学・学部について】

C3: 学習者、JS3: 同等の母語話者

	【C3】	【JS3】		【C3】	【JS3】
1	C3 : え、いま何回生?	(0)	8	JS3 : あっ、A です。	(+)
2	C3 : /大学生?	(0)	9	C3 : 同じ?	(0)
3	JS3 : /いままさん		10	JS2 : はい、同じです。	(+)
4	JS3 : 3 回生です。	(+)	11	C3 : 何学部?	(0)
5	C3 : 3 回生。	(0)	12	JS2 : 私、文学部です。	(+)
6	JS3 : えー。		13	C3 : 文学部。	(0)
7	C3 : どの?	(0)			

以上の分析・考察から、「同等」の相手と初対面会話をする際における C3 のスピーチスタイルの選択基準は次のようにまとめられる。ドラマのなかの言葉遣いに大きく影響されて普通体の使用に慣れており、また会話の際にスピーチスタイルなどの言語形式よりも情報内容に集中しているため、無意識的に普通体基調を選択している。

## 6 まとめと今後の課題

本稿では、中国で日本語を習得した後来日した学習者を対象に、年齢による相対的上下関係の認知と会話に見られる文末の選択という 2 側面から、母語話者と比較しつつ、対話者の年齢に応じた、学習者によるスピーチスタイルの選択について分析考察した。明らかになった主要な点を表 3 にまとめる。なお、母語話者の選択基準は三牧 (2002) に基づいて作成したものである。

表3 対同学年と対下学年における母語話者と学習者のスピーチスタイルの選択基準の比較

		スピーチスタイルの選択基準	
		対同学年	対下学年
母語話者		同等の相手には、同一スタイル・同程度の丁寧度で話す 「上下関係」を優先し、同等意識・仲間意識表示を重視 → 普通体基調 「親疎関係」を優先し、初対面の疎の人間関係表示を重視 → 丁寧体基調	上位者は基本的スピーチスタイルをどちらに設定しても可 「上下関係」を優先し、上位者意識表示を重視 → 普通体基調 「親疎関係」を優先し、初対面の疎の人間関係表示を重視 → 丁寧体基調
		中国の大学で学習した規範と来日後の接触場面で経験した実際使用の間に矛盾が生じた ↓ 新たな基準を再構築：相手と同一のスピーチスタイルを選択	
学習者	C1	母語の社会的文化的・社会言語学的ルールの影響 + 自ら作り上げた待遇規範 ↓ 相手に対する心的距離感に応じてスピーチスタイルを選択	
	C2	ドラマのカジュアルな言葉遣いの影響 + 注意の焦点を言語形式ではなく、話の内容に置く ↓ 相手に関わりなく、無意識的に普通体を選択	
	C3	学習者のスピーチスタイルの選択基準は、大学で学習した規範、来日前および来日後の言語接触経験、言語形式に向けられる注意度、母語の社会的文化的・社会言語学的ルール、といった数々の要素によって影響を受けている。影響を受ける要素の組み合わせや優先順位、相互作用は学習者の間で違いがある。 ⇨ そのため、学習者間のスピーチスタイルの選択基準に個人差が非常に大きく表れている。	

↑  
年齢の認知  
↓

母語話者にとっての同等：同学年

学習者にとっての同等：同学年、下学年を含めた同世代

表3に示す通り、学習者は数多くの要素から影響を受けているため、スピーチスタイルの選択基準に個人差が大きかった。本研究からも学習者言語の複雑性と多面性がみとめられ、スピーチスタイル研究における「多元要因アプローチ」(ロッド1996)の必要性が再確認された。ただし、今回の調査が少人数の記述的研究であったため、スピーチスタイルの選択基準が3人3様という結果になったが、学習者の間で共通したスピーチスタイルの選択原理はないのか、今後インフォーマントを増やして検証する必要があると考える。また、縦断的に収集したデータを用い、学習者のスピーチスタイルの発達過程を明らかにすることも今後の課題である。

## 参考文献

- 伊集院郁子「母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分け—母語場面と接触場面の相違—」『社会言語科学』6巻2号、社会言語科学会、2004、pp.12-26。
- 上仲淳「中上級日本語学習者の選択するスピーチレベルおよびレベルシフト—日本語母語話者との比較考察—」『日本語教育論集—小出詞子先生退職記念—』凡人社、1997、pp.149-165。
- 上仲淳「中国語を母語とする上級日本語学習者のスピーチレベルの選択基準」『言語文化学』16号、言語文化学会、2007、pp.141-154。
- 宇佐美まゆみ「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能—」『学苑』662号、昭和女子大学近代文化研究所、1995、pp.27-42。

- 渋谷勝己「スタイルの使い分けとコミュニケーション」『言語』37 卷 1 号、大修館書店、2008、pp.18-25。
- 清水崇文『中間言語語用論概論—第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育—』スリーエーネットワーク、2009。
- 田鴻儒「中国における上級日本語学習者のスピーチレベルの使い分け—初対面会話相手の年齢に応じて—」『言語文化』18 号、言語文化学会、2009、pp.169-181。
- 田鴻儒「接触場面初対面会話の初期段階における普通体使用」『2010 年度日本語教育学会秋季大会発表論文集』日本語教育学会、2010、pp.171-176。
- ネウストプニー J.V.『外国人とのコミュニケーション』岩波新書、1982。
- 橋本永貢子・三井栄「日中の待遇表現に関わる“ものさし”について—二つのアンケート調査の統計的分析から—」『社会言語科学会第 16 回大会発表論文集』社会言語科学会、2005、pp.128-131。
- 三牧陽子「待遇レベル管理からみた日本語母語話者間のポライトネス表示—初対面会話における『社会的規範』と『個人のストラテジー』を中心に—」『社会言語科学』5 卷 1 号、社会言語科学会、2002、pp.56-74。
- ロッド・エリス、金子朝子訳『第二言語習得序説—学習者言語の研究—』研究社、1996。
- Kasper, G. & Rose, K. R. Pragmatics in language teaching. In: K. R. Rose & G. Kasper (Eds.) *Pragmatics in language teaching*. Cambridge University Press. 2001. pp.1-9.
- Labov, W. *The social stratification of English in new york city*. Center for Applied Linguistics. 1966.